



姿勢保持とシーティング 《その3》

東京都立医療技術短期大学
大津慶子

3. デュシェンヌ型進行性筋ジストロフィー症（以下、DMD）

DMDは筋ジストロフィー症のなかでも最も多い疾患で伴性劣性遺伝を示し、男子に発生します。母親が保因者の場合は、男子の1/2の発症となり、女子の1/2は保因者となります。他児は正常です。歩きだしは、やや遅い位ですが、ころびやすい、立ち上がりにくいといった症状が気になるようになり、小学校に入学する頃には重いランドセルを背負って登校するのは大変になってきます。大部分のDMD児は8才から11才位で歩行不能になります。20才を越えて生きるのは難しいといわれていますが、20才を過ぎて、意義のある生活を送っているDMD成人の方も沢山いらっしゃいます。車椅子になってからの長い期間をどのように過ごしていくかは重要な問題です。なんとか身の回りのことを自分でやるようになる小学生の時期に介助によらなければならないことが多くなってしまいうからです。幸い、指先や手の細かい動作には問題がありません。食事をしたり、書いたり、パソコンを使ったりといった動作は、座位保持がきちんとできていれば、問題なくできます。呼吸が困難になってきて、人工呼吸器をつけたり（これには体外式、気管切開の場合があります）、寝たきりの状態になった場合にも指先を使った入力スイッチで、いろいろな機器を動かすことは可能です。

在宅の場合は、主に母親の介助によって、生活の大部分を過ごすことになってしまいうでしょうし、施設では、職員の介護の体制によって、やりたいことを行える時間が限られるでしょう。少しでも自力でできることを増やしていけるとDMDの方の生活の質を豊かにしていけると考えます。ベッドに寝たまま周囲が見れるように、方向が変えられるミラーが、横浜市総合リハビリテーションセンターで製作されて、南九州病院のDMD成人の方に届けられたというお話は、まさにこの点であると思いました。さて前置きが長くなりました。長い座位で座って過ごす期間に起こってくる問題について考えてみます。

a) 座位期におこってくる変形

DMDの脊柱変形の進行について、Wilkinsは62名のDMDのレントゲン撮影の結果を分析しました。そしてDMDの脊柱変形の形態を、Ⅰ群：初期直立、Ⅱ群：後彎型、Ⅲ群：後彎し側彎の合併、Ⅳ群：側彎型、Ⅴ群：伸展型に分類しました¹⁾。Ⅴ群：伸展型は62名中、14名でわずかな側彎しか示さなかった。この群は長期生存可能と報告しています。脊柱変形の進行は、初期直立から後彎へとすすみ、やがて後彎と側彎の合併や極端な変形に進むものと、もう一つの脊柱伸展型へ進む群と二つの流れがあるとしました（図1）。



図1 Wilkins,Gibson等の分類

この二つの流れが、実際に経過を追ったケースでどのように変化していったかを紹介します。図は全て後方からの写真をトレースしたものです。

b) 初期直立から後彎を伴った側彎へ（図2）

骨盤の急激な側方傾斜は、歩行不能後2年前半から後半にかけておこり、骨盤は右側に傾斜し、モールド型座位保持装置（以下、MSS）の使用を開始して、短期間改善が見られたが、その後水平線から30°まで傾斜しました。歩行不能5年目で、座位保持が困難となり、3点支持原理に基づいたMSSを作成して、家庭内生活や外出時に常時使用している。車椅子はシートベルト、脇のクッション、段差クッションなどを利用している。6年後半より、体幹上部が支持できず、左に倒れ、介助なしに計測ができなくなっています。

c) 脊柱伸展型へ (図3)

図3に経過を示す。初期においては、左右対称で、座圧分布は左右均等の3点座骨尾骨型で、よい体格をしていました。次第に左側への頭部偏位が目立ち、歩行不能後4年を過ぎたあたりから、骨盤の右側方傾斜と腰椎伸展、骨盤の前傾が目だってきました。座圧分布パターンは2点両座骨型から、前面に恥骨結合に近い部分の圧が高くなり、3点を示していた。座面のみのMSSをつくり、背もたれなどに依存しないで座面の調整で体を安定させて家庭生活を送っています。

このような経過は実際になぜ起こってくるのか脊柱や骨盤の動きとの関係で詳しく分析して実際の座位保持装置の製作に役立てています。

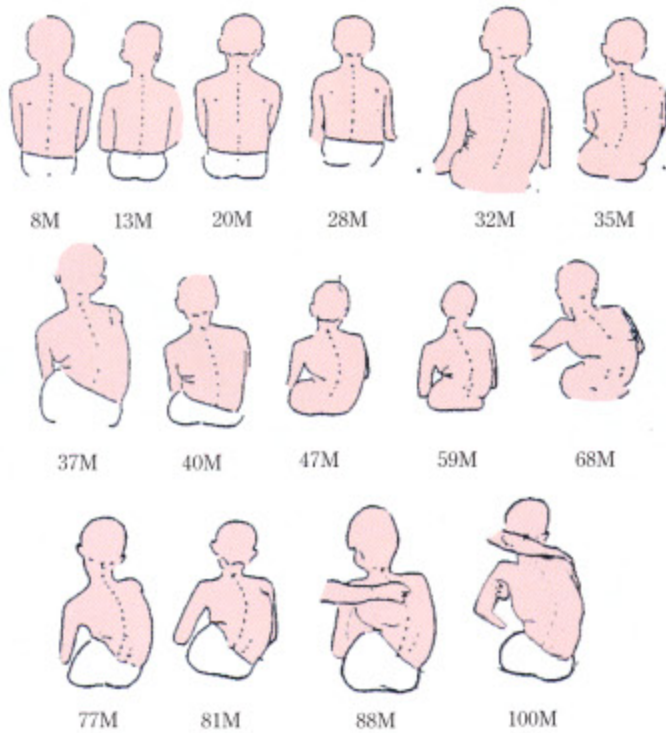


図2 事例の歩行不能後の月数でみた後方からの変化

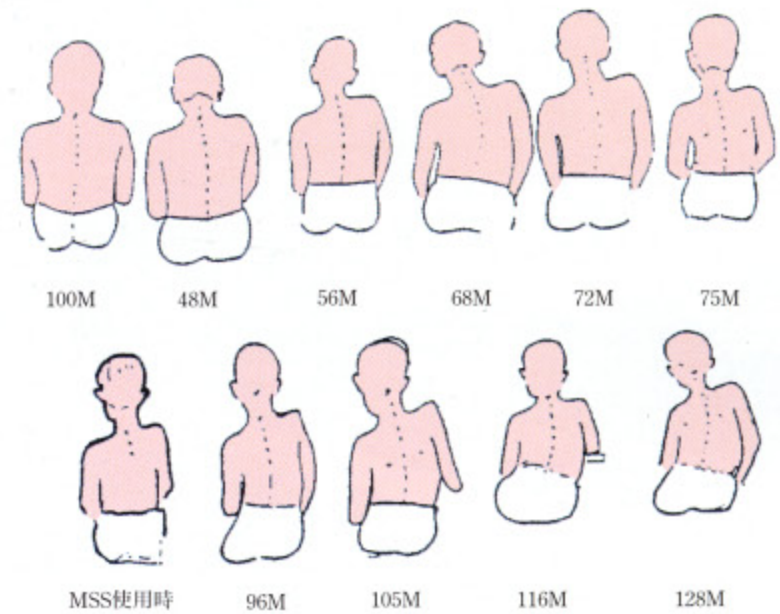


図3 事例の歩行不能後の月数でみた後方からの変化

参考文献

- 1) K.E.Wilkins, M.D.Gibson : The patterns of Spinal Deformity in Duchenne Muscular Dystrophy. Journal of Bone and joint Surgery 58-A : 24-32, 1976.
- 2) 大津慶子：筋ジストロフィー症患者の座位姿勢（その1）座位姿勢の定量測定法と自力座位可・不可群の比較. 東京都立医療技術短期大学紀要2 : 69-74, 1988.
- 3) 大津慶子：筋ジストロフィー症患者の座位姿勢（その2）座位姿勢の継時的変化. 東京都立医療技術短期大学紀要3 : 17-24, 1990.
- 4) 大津慶子他：モールド型座位保持装置製作過程の検討、東京都立医療技術短期大学紀要5 173-183, 1992.

お詫び・訂正

〈前月号 6 ページの蛙状肢位 (flog position) →frog positionに訂正〉

